

農林害虫防除研究会 Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

News Letter No.35

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.35

2015年7月31日

研究会所在地：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
果樹研究所リンゴ研究拠点 虫害ユニット
〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷92-24
ホームページ : <http://www.agroipm.org>

巻頭言

「あれから 20 余年」

西東 力
(静岡大学農学部)

応動昆の帯広大会のときだった。新参者の私にも集合の号令がかかり、何事かわからぬまま講堂に行ってみると、入り口で入会手続き。満員のなか、大御所の先生方から本研究会設立の趣旨が説明された。その熱弁にただならぬ空気を感じたことを今も覚えている。

農業の生産性が安定し、その一方で農薬に対する関心が高まっていた時代のことである。農薬関連の研究を意識的に回避しようとする雰囲気は私も感じていた。防除技術の研究はアカデミズムとかけ離れているとする風潮は今も根強く残っている。確固たる防除技術の確立は昆虫研究の究極の目的のひとつであるはずなのに、それが置き去りにされつつある。こうした危機感が本研究会立ち上げの背景にあったと思う。

学会は研究者による横の連携の場である。一方、防除技術の開発・普及には縦の連携が欠かせない。研究者から現場をよく知る関係者までが一堂に会し、個々の情報を総合化して防除システムとして構築する必要があるが、それまで全国レベルの情報交換の場はなかった。これが本研究会設立の最大の目的であった。あれから 20 余年。国際情勢とともに農業情勢は大きく変容し、会員の世代交代も進みつつある。こうしたなか、本研究会として維持、継続すべきことは何か、変わるべくして変わるものは何か、それぞれが未来に向けて問い直すときかもしれない。

さて、農薬についていくつか書き留めたい。昆虫は植物に含まれる有害物質を解毒しながら栄養（エネルギー）を取り込んでいるが、この解毒機構は殺虫剤の無毒化にも利用されている。そもそもエネルギーの取り込みなくして生物は生命体として存立しない。そう考えると、殺虫剤の作用機作や解毒機構を研究することは昆虫の本質に迫ることに他ならないと言えよう。事実、殺虫剤関連の研究を通して、生理学上の重要な知見がいくつも発見されている。また、殺虫剤に対

する抵抗性発達の状況を調べていけば、それは進化の過程を目の当たりにしていることになる。

殺虫剤の弊害のひとつにリサージェンスが挙げられる。しかし、見方を変えれば、リサージェンスを起こす害虫ほど土着天敵がよく働いていることの証しでもある。この現象を利用すれば、自然状態では把握しにくい土着天敵の役割を客観的に評価できる。土着天敵の働き如何によっては、その温存・利用を図ることが先決であり、理にかなっている。殺虫剤と天敵の併用技術の開発が課題とされるなか、両者の相互関係をもっと深く理解したいと思う。そこには興味深い研究テーマが眠っているにちがいない。

化学合成農薬の本格的な使用が始まってから 70 年。この間、防除技術の中心に位置し続けてきたが、その中身は様変わりした。殺虫剤の有効成分は天然物やその誘導体に移行し、その多くは普通物である。従前のイメージとはかけ離れたものとなっている現状を、折につけ、外部に向けて発信していくことも大切である。
(2015年6月15日受領)

ニュース

資料の紙媒体は必要か？

後藤哲雄
(茨城大学農学部)

「ペーパーレス化」と称して、とても必要とは思えないものまで、何でもかんでも事務から pdf で送られてくるようになった。少しは頭の中を経由してからにして欲しいと何度もお願いしているが、完全に無視されている。必要と判断すれば、結局、打ち出して読んだり、書き込んだりするのだから、プリンターメーカーのインクカートリッジ購入に貢献しているに過ぎないのではないかと思っているが、輪転機による資料の配付はほぼ無くなってしまった。必要な資料は簡単便利なコピー機による複写で済ませているようだ。大学の予算が年々少なくなっているのだから、せめて全員に配布する資料は安く仕上がる輪転機を使ってもらいたいものであるが、そのような発想はなくなってきている。一方、ゼミで使う 10 部ほどの資料を学生にせさせと輪転機で作らせている研究室がある。どう考えても資源の無駄遣いなのだが、コピー機と違って課金されないのだから、その研究室にとっては予算の節約になるらしい。お陰で、せっかく最新鋭の輪転機を入れても画像がどんどん汚くなっていくし、故障も多くなり、講義資料づくりに支障が出ることもある。なんだか本末転倒のような気がしてならない。

研究に欠かせない文献は、電子化(pdf)され、便利になったと言え、大変便利である。また狭い教員室に大量の学会誌や関係書籍、文献を置くこともなかなかしんどくなってきている。A4 サイズ 4 段の文献キャビネットを 10 個以上所持する私は、廊下にまでキャビネットを置いていることから、大学上層部には白い目で見られ、定年までの月日を数えられている様子である。ある教

員には「全部 pdf にすればキャビネットは必要ないでしょ。私は全部 pdf 化しましたよ」と嫌みを言われる始末。数万点の文献を pdf 化し終わる前に定年になりそうなので、そういう無駄なことはしないことに決めた。どうせ読むときは打ち出さざるを得ないのだし、本学は資源リサイクルには全く関心がないので、町に大量の紙資源の焼却処分を頼むのも気が引ける。加えて、pdf にも質の違いがあるらしく、画面で見ると分には何の問題もないが、打ち出すと文字が飛んでしまうものがある。後々に影響するため、結局は確認のために打ち出した原稿を保存しておくことになる。それに加えて、カセットテープ(最近では記録媒体として再認識されているらしい)、5 インチのフロッピーディスク(FD)、3.5 インチの FD, MO, そしてハードディスク(HD)と記録媒体のめまぐるしい変遷を経験し、既に5インチのFDなど読むことすらできない歯がゆさを知っている私にとって、一般人が使う記録媒体など、とても信用のおける代物ではないという思いも強い(時代遅れと蔑まれながら)。

ここからが本題である。実は長年かけて『インセクトリウム』の全号をそろえることができたのである(写真)。1963年に出た、いわゆる「0」号もある(正式には1964年1月創刊)。1974年からは自身で購入していたので、10年ほど遡ったわけであるが、なかなか手に入らなくてえらく苦勞した。一部はドイツの古本屋で仕入れた(ネットに感謝)。これらの散逸を防ぐため、すべて製本して保存している。おそらくこの雑誌を pdf で見ても感動しないであろう。写真などは紙媒体でないと、やや迫力に欠けるし、各紙に特有の匂いも味わえない。本誌は中高生向けとなっているが、かなり高度な内容を扱っていて、ずいぶん勉強させてもらったものである。不思議に1号の欠号もなく揃っていたところを見ると、私なりに大事に思っていたのであろう。本誌の収集の苦勞話をしても仕方ないが、これぞと眼をつけた年配の方に伺ってみると皆が「定年の時に処分した」と仰る。古本市場に出してくれれば探求者の目にとまるものをと何度も歯がゆい思いをした。そんなこともあってさまざまな資料を「紙媒体」で保存(製本)している。製本してある資料の中で変わりものをいくつか上げてみよう。“Networks in Evolutionary Biology”(日本語, 1~6号(全号)。その後再開されることはなかった)、筑波昆虫科学研究会の「にゅうすれたあ(1~42号, 全号)」とシンポジウム要旨集(1~19回, 全)、小笠原自然環境研究会の「BONIN 通信(1~22号, 全号)」, 報農後援会の「ろまん報農(準備号~42号, 継続中)」などである。何の役に立つかわからないが、資料は散逸したら終わりだと思って頑張ってきたつもりである。しかし、欠号を埋めることができないものも多く、往生している。その一つが、「森林防疫」である。古本としてはほとんど出なくなった。本研究会に関係の深い「植物防疫」は pdf 化が検討されていて、「農薬」、「農薬と病虫」を含めてすべて電子化されると聞いている(「植物防疫」に改題されたのは5巻7号から)。待ち遠しい限りである一方、少しずつ本誌を集めているが、9巻より前はなかなか古本として出てこない。全巻揃っていないのに法外な値をつけている古本屋もあるが、10巻以降の本誌をもっている身にとっては魅力がないこと甚だしい。

大学ではExperimental and Applied Acarology (EAA)を第1巻から購入している。現在の年間購読料は43万円近い。これを一研究室が担っている。大学の図書館は、雑誌がなくて閑散としている。研究費が削減されると真っ先に削られるのが雑誌代だからである。館員には電子ジャーナルに切り換えるようさんざん責め立てられたが、頑として譲らなかった。うちのような貧乏大学は予算がないので、電子ジャーナル代もけちっていて古い巻号の論文をダウンロードできないのである。これでは文献としての価値がまったくない。堪え忍んで購入し続けてきた甲斐があったと思っている。校費を雑誌代として投資できたり、各種の雑誌を製本できるのは、実は日本植物防疫協会の「新農薬実用化試験」を受けているからである。「実用化試験」が貧乏大学の研究を陰でどれだけ支えて来てくれたことか。その功績を決して忘れることはできない。

収蔵場所の確保や所蔵文献の増加に伴い、電子化は時代の流れなのかもしれない。しかし、例示したように、電子媒体が必ずしも、誰にでもフレンドリィであるわけではない。電子媒体と紙媒体を敵対関係として捉えるのではなく、お互いが補完し合う関係であるといえるように進んでいって欲しいと願っている。目的としない記事に目がとまり、それに引き込まれることは電子媒体ではあり得まい。紙媒体の良さである。世間の目が紙媒体から離れないように、また古い文献がどんどん市場に出回るようにとのささやかな希望を乗せて。 (2015年5月15日受領)



“落とし文”考

林 秀樹
(アース製薬株式会社)

5月の終わりの週末、気候の良さに誘われて東京近郊の山、川苔山に山登りに出かけました。東京都心から近い高尾山周辺の山々では、“山ガール”と称するとてもオシャレなアウトドアウエ

アで着飾った女性たちが多いのですが、同じ奥多摩の山でもこのあたりの山は“山ガール”さんたちは少なく、昔ながらの静かな山登りが楽しめます。私の服装もいわゆる“オールドファッション”で、最新のウェアを身にまとった“山ボーイ”スタイルではありません。ただ、最近は大クマの出没事例が増えたため、クマ避けの鈴を着けた人が多く、山の静寂や小鳥のさえずりを邪魔するのが玉に瑕です。

さて、登山口から山道に入ってそこそこ登ったところ、地面に何やら葉っぱを丸めた葉巻状のものが落ちていました。言わずと知れた、オトシブミの揺籃です。いったいなんという種のオトシブミが作った揺籠なのでしょう。ついつい気になり、揺籠を3つばかり拾ってズボンのポケットに入れてしまいました。

喘ぎ喘ぎ頂上をきわめ、痛む膝をだましながら急な坂道を下って何とか山を下りて帰宅した後、持ち帰った揺籠を湿った土を入れた容器の中にそっと置いたのです。その後、カラカラに乾かないように、時々霧吹きで水をかけてそのままにしておいたのですが、約2週間が経過した頃、1頭の成虫が現れました。次の日にもう一頭が現れ、結局3つの揺籠から3頭の成虫が無事に羽化しました。

早速、このオトシブミの種の同定に取りかかります。おそらく、このオトシブミはウスアカオトシブミ (*Apodenus rubidus*) ではないかと思われ、山地では普通に見られる種のようなものでした。ただし、この種は揺籠を葉から切り離さないタイプですが、切り離して地面に落とすものもいるそうです。



図1. 羽化した成虫



図2. 脱出孔のある揺籠

この成虫にヒメシヤラの葉を与えたところ、結構気に入ってくれたようでムシャムシャと食べてくれました。羽化した後の脱出孔の空いた揺籠を取り出し、葉を広げてみたところ、幼虫期間に食べたと思われる痕跡は一部分で、しっかりと揺籠の形状が保たれています。幼虫の生育に必要な食物の量だけを考えれば、それほど大きな葉を一生懸命巻く必要はないのですが、オトシブミの親は食料だけではなく、外敵や気象環境などから子を守るために、強固なシェルターのような住居を労力を惜しまずに作ったのでしょう。小さな虫と言えども子を思う親の愛情が窺い知れますが、生物学的に言うならば親の愛情ではなく、長い年月の中で淘汰を繰り返されなが

らこのような習性に進化したということであり、小さな虫にも生命の神秘を感じてしまいます。

さて、この虫の名前の由来である“落とし文”とは、政治批判のような公然とは言えないことを文書として落としておくものや、火付けなどの脅迫文を書いて家に投げ込んだ文書のことだそう。親の愛情いっぱいの揺り籠とはほど遠いものでした。私自身、“落とし文”とは、渡したくても勇気がなくて渡すに渡せない恋文を、愛しい相手が拾うのではないかと思われる場所に、そっと置いておくようなものと思っていました。全くの的外れで、そんな男女の恋の駆け引きとは全く無縁の無粋で危険な代物でした。最近の国会では安全保障関連法案について激しく審議され、憲法学者が違憲であるとの見解を述べても、安倍政権は合憲であるとして法案成立に向けて推し進めています。そもそも、集団的自衛権を、憲法を改正せずに政権の憲法解釈による閣議決定で認めることにしてしまいましたが、はたしてそれが正しい方策だったのか？といった政権批判をする場合に、昔ならば“落とし文”を使ったのかもしれませんが。今は民主社会ですから、“落とし文”を使わなくとも自分の意見を堂々と言えればいいわけで、“落とし文”の役目は終わってしまったのかもしれませんが。小さな虫が作る可愛い自然からの贈り物であって、俳句の季語に使われる文学的な言葉として、これからも使われていけばよいのでしょう。(2015年6月14日受領)

「日頃の観察は何よりの対策」

植竹恒夫
(埼玉県農業技術研究センター)

この3月までの2年間、埼玉県種苗センターに技術統括アドバイザーとして派遣されていました。主な仕事は、いわゆる「病虫害発生の見張り番」で、ここで求められる苗は病虫害の発生ゼロのものです。センターの職員は、ベテランばかりで、仕事の流儀もあるようでした。また、過去にこの職に派遣されてきた職員の影響もあり、違う防除体系も組みにくい。そんな中でどうにか過ごしてきました。イチゴ苗、ナシの接木苗、わけねぎ、キュウリ接木苗、水稻苗、花・野菜のセル苗などの育苗中、防いでいても設備の限界もあり、当たり前のように病虫害は発生しました。また、街路樹にアメリカシロヒトリが大発生してハウス内への侵入を必死に阻止したこともありましたが（隣接した水田の生産者から市に苦情が届いたようです）。とにかく、減農薬栽培技術を研究してきたはずなのに、今までで最も農薬を散布した2年間を過ごしてしまいました。

もちろん、病虫害の発生を防ぎ、農薬の効果的使用のために職場全体で取り組まなければならないことがたくさんありました。設備を整備しなければ難しいものが多いのも現実です。各育苗ハウスに前室の設置、ハダニ防除のための炭酸ガス処理装置の導入など進めたいものです。

派遣中に、配布した野菜のポット苗にセンチュウがいるとの情報が届いたことがありました。結果的には、ネグサレセンチュウではなくの食菌食カビ性のセンチュウであることが判明しまし

た。培土の蒸気消毒の実施，コンクリート床ハウスでのベンチ栽培，底面灌水システム，井戸水のチェックなど担当職員と一緒に作業工程を確認しました。しかし，侵入経路は特定できませんでした。推測ですが，ハウス外部の苔むした人工芝や排水溝の泥に生存するものが風雨等で跳ね上がったのではないかと考え，ハウス周辺の定期的な清掃や計画的な改修の必要性を提案しました。植物寄生性ではないセンチウであればいいのかなと今は思うのですが，種苗供給の前提に立つと対策が必要です。

また，病虫害を持ち込まない心構えとして，着替えの徹底，作業の順序，農機具の扱い，速やかな報告など当たり前だけ重要なことを再認識しました。そして，幸いだったと思うのは，パートを含め職員の皆さんが想像以上に観察眼を持っていたので，日頃の観察による報告と農薬の偉大な力によって被害を免れることができたことでした。(2015年5月19日受領)

ダイズサヤタマバエはなぜ秋田県のエダマメで多発生するようになったのか？

菊池英樹
(秋田県農業試験場)

以前は特に問題とならなかった害虫が，ある年から急に発生が多くなり，大きな問題となる事例が近年いくつか見受けられます。近年秋田県で特に問題となっているのがエダマメにおけるダイズサヤタマバエの発生です。

ダイズサヤタマバエはマメ類の若莢に成虫が産卵し，ふ化幼虫の摂食により莢が奇形化するため，発生が多ければ収量が低下することとなります。以前は年により僅かに被害莢が確認できる程度でしたが，5年ほど前から収穫時期の比較的遅い晩生の作型で被害が目立ち始め，一昨年には全県的に中生以降の作型で幅広く被害が確認され，収穫皆無となる圃場も多く見られる状況となりました。

とりあえず本県における発生生態を明らかにするため，昨年いくつか調査を行いました。県内で作付けされるエダマメ各作型における開花期と収穫時の被害莢率について調査したところ，開花期が6月下旬と早い早生作型でも被害莢が僅かに確認され，早生～中生作型では徐々に被害莢率が上昇し，開花期が8月となる晩生作型の被害莢率は50%を超えるに至りました。このことから，開花期が進むにつれ徐々にダイズサヤタマバエの発生が増加していることが示唆されました。

それでは，なぜ本県でこのように被害が多くなったのでしょうか？近年秋田県では「えだまめ日本一」を目指し，行政や生産者が一体となって生産振興を図っております。長期継続出荷を目指し，以前は少なかった早生～中生作型の作付面積も飛躍的に増加しており，早生から晩生まで長期間エダマメが圃場に存在する状況となってきました。また，エダマメと同じ作物であるダイ

ズも転作作物として大面積で全県的に作付されています。このように時期的にも面的にもマメ類が存在する状況が、ダイズサヤタマバエの多発生に結びついたのでないかと考えております。

越冬するのか飛来性なのか？世代数は？などまだまだ把握できていない点が多くあります。今後も発生生態について解明を進めると共に、防除対策についても並行して検討していくこととしております。

(2015年6月9日受領)

虫屋の妻の叫び

朔蟲亭ディアナ
(某会員家族・仮名)

上略・・・はい。専業主婦でございます。生まれは子年でございます。いえね、私も初めはこれほどとは予想していなかったんですよ。

決して自慢などするわけではございませんが、私だってそれなりの家に生まれてそれなりの教育を受けて、容姿にしましても吉永小百合とは言わないまでも都はるみには見劣りしないレベルでしたのよ。会社だって、動物飼料の生産を主業にしまして、そこそこのお給金を払って下さるところに勤めておりました。ですから、いわゆる人生の選択肢は人並み以上にあった上でのごさいました。

仕事柄、生き物を相手に研究をするのがどんなことか、それを生業にしている人間がどんな風かということには、私なりに理解をし、ある程度の覚悟は持ち合わせているつもりでした。日曜祝日に御飯を我慢してくれる都合の良い研究材料が減多に無いことだって知っておりましたから、週末や年末年始が仕事になってしまうこともありましょう。そんなお仕事であれば多少なりとも研究材料のことを愛している者でないと研究者が務まらないことだって解っておりました。生き物もいろいろですから、「虫」を相手にする研究者がいても何ら不思議はありません。ですから、「虫」を「愛している」人が例え少々の変態気質を持ち合わせていたとしても、平気の平左衛門で受け流せる心づもりでございました。しかも、農作物の害虫を退治して、人様のお役に立てる研究に携わってらっしゃる公務員さんだっというじゃありませんか。そりゃあ当時は高度経済成長期の真っ只中ですから、商社や製造業にお勤めの方々に比べればお給金の額はそれほど恵まれたものではありませんでしたけれども、結婚のお相手としては申し分ない方でした。ただね、悔しいじゃないですか。私の想像を遥かに上回ったのです、旦那様の「虫」に対する愛情の深さは。

忘れもしません、新婚旅行の時でした。返還から間もない沖縄に参りましたが、海の碧も花の

紅もそれはそれは綺麗で、辺りをひらりひらりと舞う色とりどりの蝶々は、「虫」に興味が無かった私にさえ刺激的に映りました。ですが、残念なことに一番記憶に残っているのは、道の真ん中で突如として「小」の方をお始めになり、そこへ飛んで集まってきた蝶々を無心に捕まえ始めた旦那様の御勇姿でございます。この光景に続く「早くお前も採りなさい！」との言葉を聞いて以降はショックで記憶がおぼろげでございます、「これは選択を誤ったかもしれない」と初めて深刻に認識したのは旅行から帰ってしばらくが経ってからでした。おかげで、今なら流行の空港離婚のチャンスは逃してしまいました。

子供が出来ますと、どちらの家庭も家族旅行の計画で盛り上がりますでしょう。私も類に漏れず旅行が大好きでした。どこに行こうかしら、どんな素敵なお宿に泊まろうかしらと思案することがとてもとても楽しみでした。けれども結果から申しますと、いつも当家の家族旅行の先は、珍しい「虫」がいる場所に限られておりました。桜枝岐でオオクワガタを狙う、木曾御嶽でネキダリスを狙う、近場でしたら沖ノ島でオオキンカメを狙う。今ではこれらが何のことだか解るようになってしまった自分が恐ろしいですわ。そうそう、こんなに近くに住んでいますが、ディズニーランドには絶対に参りません。あちらにはそもそも「虫」が居りませんのでね。いえ、構いませんのよ。子供たちも（大混雑の遊園地や観光地で見られるのは他人の背中だけだと見事に洗脳されておりましたから）大自然との触れ合いを大いに楽しんでおりましたし、「虫」の居る山には温泉や野草といった他の楽しみもありましたから、私も旅の行き先には文句を申し上げたことはありません。ただ、話をややこしくするのが、「ナイター」と呼ばれる虫屋独特の夜の過ごし方でした。シートと発電機と蛍光灯が車に積み込まれたとき、それは旅先での夜を屋外で過ごすことを意味しておりました。現地に着きますと、後部座席を倒した車の内部は見事にホテルと化してしまうのです。そして夜の深い森、蛍光灯に照らされるシートに群がる無数の「虫」たちに狂喜する子供達を見ながら、満足そうに目を細める旦那様を見ながら、私は既に引き返せない領域に自分が居ることを認めるほかありませんでした。お宿を選ぶ楽しみが満喫出来ないところへお嫁に来てしまった後悔に、私は今でも打ち拉がれております。

二人の子供のうち、幸いなことに洗脳の度合いが軽かった次男は、「虫」とは関わりのない世界で安寧な生活を満喫しております。一方、悲しいことに長男はすっかり虫屋としての生活に感化されてしまいまして、高校卒業後は総合的害虫管理なる珍妙な学問を修めるべく岡山に居を移しました。こうして、子供たちが巣立った後、拙宅の子供部屋がどうなってしまったかというのが、一番の悲劇でございます。家で一番陽当りの好い2階の8畳部屋には、私が自分の趣味を差し挟む隙もなく、いつしか旦那様が連れていらした大勢の同居人たちが我が物顔で居座るようになりました。プライバシーの問題もございますので、これらの方々のお名前は伏せておくことにいた

します。それにしても、冷暖房が24時間365日稼働し、25℃一定、14L10D条件だけに管理されたお部屋に、旦那様の献身的かつ超人的なお世話の技法が伴うとあっては、居心地もそれはそれは快適なようでございます。しかも、嗚呼、恐ろしい。光熱費で家計を逼迫する厚顔な同居人たちは、こともあろうに繁殖まで始めてどんどんその数を増やしていくじゃありませんか。呆れたことに旦那様ときたら返ってこれに気を良くし、「君たちは何が御所望かしらん？」とばかりに、日々あれやこれや変わった御馳走を用意しておもてなします。同居人達が誤って外に出てしまいますと何かと面倒ですので、今では洗濯物を干す時にも彼らの御機嫌を伺わねばならなくなりました。私は子供たちの代わりにやってきた彼らが羨ましいとさえ思うようになりました。いえ、本を糺せば、「虫」の研究者は「虫」を職場で飼うものだと高を括っていた私が甘かったのでございます。

私にも趣味はございます。陽当りの良い部屋でヨガを楽しんだり、ピアノを習ったり、ガラス細工のコレクションを愛でたり、音楽を聴いたり、やりたいことは山ほどございますのよ。それがどうでしょう、現実とのギャップ。せめて同居人との主権争いに敗けたこの不甲斐無さ、この遣る瀬無さを誰かと共有することができれば、少しは気も晴れるかと思ひ、駆け出しの前座の身分ではございますが、このたび高座に上がらせて頂きました。もしかすると、世の「虫屋」(や、その同居人の「虫」達)と生活を共にしていらっしゃる方々の中には、私と同じ悩み苦しみを抱えている方も少なからずいらっしゃるのではないかしら。「虫屋及び虫に囲まれた一般人の生活改善のための多面的アプローチ(案)」と題しまして、会員家族が参加可能なシンポジウムか小集会を開催して頂ければ、それはそれは盛り上がること請け合ひでございます。研究会事務局におかれましては、お取り計いの程よろしくお願い申し上げます。今後の農林害虫防除研究会のますますのご発展を祈念いたしまして、この辺でネタを下げさせていただきます。・・・受け囃子

【文責：清水 健】

(2015年7月2日受領)

大学校での病害虫の講義

栗久宏昭

(広島県立農業技術大学校)

病害虫の試験研究の職場から、農業技術大学校に異動して2年目となりました。口下手で人前でしゃべることが苦手なので、学校の先生には向いていないと思っていましたが、訳あって大学校への異動を希望して、「先生」になりました。採用当初の4年間だけ果樹特技の普及員をしていましたが、その後24年間は病害虫防除所、農業技術センターの病害虫部門を長く経験しました。

大学校では果樹の試験研究機関に長く在籍したため、落葉果樹を担当することになりました。

試験研究時代には、栽培に無関心だったわけではありませんが、1年を通じてすべての栽培管理をした経験はありません。栽培のことが分からなければ、病虫害の診断、対策が不十分になると思ってはいましたが、実行できていませんでした。その時のつけが来て今非常に苦勞しています。果樹の試験研究時代には栽培管理をやりながら、病虫害の試験研究をすることを実践している先輩がいましたが、その真似が出来ていなくて後悔しています。

農技大の授業では、高校を卒業した若者に、病虫害の講義もしていますが、病虫害についての知識が少ない学生相手に興味を持って聞いてもらうのに苦勞しています。知りたい病虫害についてアンケートを取り、それについて毎回の講義の残り時間で解説したり、病虫害の実物を持ち込んで紹介したり、農薬の実物（空容器を使って）を見せてラベルの読み方を解説するなど色々手を打っていますが、話し方にも問題があり、いまひとつ反応が鈍いです。

そうはいつでも農業後継者になる可能性がある貴重な若者たちなので、病虫害防除について誤った知識を持たないように、総合防除、正しい農薬の使い方など身に付けてもらうよう講義を工夫していこうと日々悩んでいるところです。

この原稿を書いている今もイチゴで見つけた幼虫が何か？と学生が宿題をくれました。飼育して診断する手間が大変と思いつつも、病虫害に多少関心を持ってくれ始めたのかなと、少しうれしい気持ちになっているところです。まずは正確な診断をして、期待を裏切らないようにしなくては。
(2015年7月7日受領)

はじめてのヤゴ調査

栗原 潤
(長野県農業試験場)

転勤に伴い4月から水稻害虫を担当することになりました。これまでの園芸作物と同じく、斑点米カメムシ類など害虫の防除に関する課題が主体であることはもちろんですが、それらに加えて「ただの虫」を扱うことになりました。今回はその中でも天敵としての働きも知られているトンボ類調査について紹介します。

皆さんもご存知のとおり、水稻用育苗箱施用殺虫剤のトンボ類幼虫に及ぼす影響については、多くの研究成果が報告されています。長野県においても、環境負荷の少ない農業を推進する上での重要な情報と位置づけ、データの蓄積を進めています。具体的には、農薬残留の担当者が土壌や田面水の残留値をモニタリングする一方で、害虫担当である私がトンボ類の生息状況について調査しています。数年前から現地圃場をお借りして、施用する殺虫剤の種類または時期を変え、どのような組み合わせがトンボ類幼虫（ヤゴ）に影響を与えるのか比較検討し、影響の少ない技

術を確立することが目標です。

この調査法の一つに「田面の直接観察」があります。50cm×50cmのプラスチック枠を水田内に沈め、その中に生息するヤゴを数えます。前任者からの引継書を読んで、わかったような気になって現場に乗り込んだものの、最初はどこに何頭いるのかさっぱりわかりませんでした。その上、焦った挙句に不用意に手を突っ込んでしまい、せっかく澄んでいた田面水を濁らせ、さらに状況は悪化する始末。結局、静かに枠を沈めた後は、しばらくじっと水中を見つめ続けるのが一番だということを学習しました。この調査を続けていて「どこかで見たことあるな…」と、気がついたこと。それは子供用の絵本「ミッケ！」にととてもよく似ていることです。これは、おもちゃや模型などがごちゃごちゃと並べられている中から、目的のものを探していく謎解き型絵本のシリーズです。なかなか見つけられず若干イラッとしますが、根気よく眺め続けていると「ミッケ！」となりスッキリする訳です。その1冊に「こわーいよる」というのがあり、月面に隠れているトカゲやサソリ（のシルエット）を探し出すページがあります。これが田んぼのヤゴとそっくり。田面水中にいる多くのヤゴの体色は、土壌表面の色とほとんど区別が付きません。体のわずかな斑紋や動きを頼りにして、「ミッケ！」。かつて話題になった絵本「ウォーリーを探せ！」よりもイライラしないので、普段のトレーニングもおすすめです。

さて、そんなヤゴたちも、7月上旬からは株上に這い出してきて次々に羽化してきました。田園風景を舞い飛ぶアカネトンボは日本人にとって身近な昆虫であり、環境保全型農業の象徴のようにも扱われる状況となっています。今後、県農試としてこれらの情報をどのようにまとめ、農業現場に提供していくのか、今後の課題であると考えています。 (2015年7月16日受領)



写真 直接観察の様子



写真 羽化の様子

ミナミアオカメムシの魅力？

大仲桂太
(三重県農業研究所)

虫害研究者として欠かせないのが、実験用昆虫の飼育です。私自身も大学時代はヒメトビウンカ、クロハラカマバチ、就職してからはナミハダニ、ヒメボクトウ、ミナミアオカメムシをはじめとしたカメムシ類など、様々な昆虫を飼育してきました。虫さんたちのお世話をしていると、害虫と言えどどこか憎めない部分も見えてきて、さながらペットを飼っているような気分にさえなることもあります（ヒメトビウンカに限っては最後まで「カマバチの寄主」という認識でしたが）。今回は、現在も飼育中のミナミアオカメムシ（以下、ミナミアオ）の魅力について、少しではありますが紹介させていただきたいと思います。

【意外と臆病者？】

場内や現地のは場で作物上のミナミアオの調査をしていると、よく葉裏など、こちらからは見えづらいところにいます。畝間でガサガサと作物をかき分けながら調査をしているので、その気配を察し、隠れているのかもしれませんが、しかし、中には隠れるのが下手で、触覚が見え隠れしているミナミアオもいます（写真1, 2）。また、ミナミアオの目の前に急に手をかざしてやると、鳥か何かと見間違えるのか一瞬ビクッとしたりもします。面白くて何度もやっていたら、そのうち無視されるようになりました。ミナミアオをからかって遊んでいたつもりが、逆に遊ばれていたんでしょか……。



写真1. 何か見えています

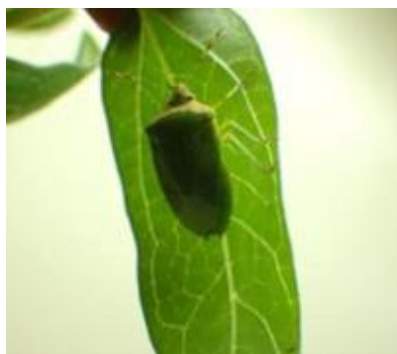


写真2. 葉裏には……

【ミナミアオは本当に臭いのか】

私もつい4年前まではそうでしたが、世間一般ではカメムシ=臭い虫の代表格という認識だと思っています。しかし、どんなに臭いにおいでも極限まで薄めるとどこかでいいにおいになる、という話を聞いたことがあります。実際、ミナミアオの飼育をしているといつの間にか鼻がマヒするのか、あれほど嫌いだったミナミアオのにおいが、どこことなく青リンゴのような、さわやかなに

おいに感じられるようになってきました。また、ミナミアオのにおいに含まれているものと同じ成分が、某有名ブランドの香水に使われているという噂も聞いたことがあります。あくまで噂なので真偽のほどは不明ですが。

そういえばミナミアオはエスニック料理には欠かせないパクチーのにおいと同じだそうです。言われてみれば確かにそうなのですが、そんなことを言われてしまうと二度とタイ料理店には行きたくなくなってしまいます。それはパクチーがカメムシ臭いから嫌なのか、パクチーを食べるとあのかわいらしいミナミアオを食べている気分になるからなのか、真相は皆様のご想像にお任せします。

(2015年7月10日受領)

人生初のキンカメムシとの出会い

近森ちさこ
(高知県農業技術センター)

愛好家が多いという、カメムシ類の中でも美麗種として知られているキンカメムシ。今年、人生初のキンカメムシと出会ったので、その感動を写真と共にお伝えしたいと思います。

私は高知県に入庁して農業振興センターで3年間勤務したのち、今年の4月から農業技術センターの昆虫担当に配属になりました。私は幼い頃から昆虫が好きで、大学院では侵入害虫ウズグロアザミウマ *Frankliniella fusca* (Hinds)の生理生態学的研究をしていましたので、こうしてまた昆虫の担当になったことはありがたく、身の引き締まる思いです。

今回は昆虫担当としての業務とは関係ない話なのですが、私は上にも述べたキンカメムシという美麗カメムシを一度見てみたいと思っていたので、上司とその話をしていました。すると、6月のある日、私の上司の下元満喜チーフが、とある所のツゲの木で捕獲したニシキキンカメムシ *Poecilocoris splendidulus* Esakiの成虫を持ってきてくださったのです(写真1)。ついに、日本一美しいカメムシともいわれる、ニシキキンカメムシとご対面！カメムシ類とは思えないその派手なお姿に、しばらく見とれてしまいました。キラキラと輝く金緑色に美しい濃い橙色の模様。カメムシ類独特の刺激臭もなく、見た目の美しさを壊しません。すぐ逃がすのもさみしいので、数日観察することにしました。

ニシキキンカメムシは5齢幼虫で越冬し、次の年の5月頃に成虫となり、6月頃にツゲに産卵をするそうです。ということは、もしかして？そうです、このニシキキンカメムシは雌だったようで、観察2日目にさっそく産卵をしていました。きれいな透き通る黄色をした球形の卵で、産下された2日後には卵に赤い眼点が表れました(写真2)。眼点が出るととても愛らしくて、まるで別の生き物のようです。数日愛でていると、ついに卵が孵化し、1齢幼虫となりました(写真3)。これまた丸くて光沢があり、かわいらしい。1齢幼虫は初めて見たらキンカメムシの幼虫とは分

からないような、地味な色合いに感じました。現在、脱皮して2齢幼虫になり、キンカメムシらしい輝く色彩が出てきましたが、これ以上は飼育するのは難しそうなので、そろそろ自然に返そうと思っています。また来年、成虫になった姿をお目にかかれる日を楽しみにしています。(写真は下元満喜氏提供) (2015年7月16日受領)



写真1：ツゲとニシキキンカメムシの成虫



写真2：眼点が現れた卵



写真3：ふ化した1齢幼虫

お知らせ

第25回天敵利用研究会静岡大会開催のお知らせ

本年度の第25回天敵利用研究会（会長：矢野栄二近畿大学教授）は、静岡市の「静岡県男女共同参画センター あざれあ」において2日間にわたって開催します。初日に「高品質農産物生産における天敵利用ー輸出促進の取組みと課題ー」をテーマとしたシンポジウムを開催するとともに、2日目にかけて研究発表を計画しております。害虫の薬剤抵抗性発達による影響を受けやすい高品質農産物における天敵利用の取組みと、今後の展開が期待される高品質農産物の輸出促進に向けた防除対応について、生産現場や国、それぞれの立場から講演をお願いし、総合討論で幅広く議論しますので、多くの方にご参加いただきますようお願いいたします。

1. 日時：平成27年12月3日（木）～4日（金）
2. 場所：（大会）静岡県男女共同参画センター あざれあ
静岡県静岡市駿河区馬淵1丁目17-1 TEL: 054-255-8440
（懇親会）静岡グランドホテル中島屋
静岡県静岡市葵区紺屋町3-10 TEL: 054-253-1151
3. 内容：1日午後にシンポジウム，以後2日にかけて一般研究発表
4. 問い合わせ先：
（大会長） 西東 力静岡大学農学部教授
（大会事務局）静岡県農林技術研究所果樹研究センター 片山晴喜・増井伸一
〒424-0905 静岡県静岡市清水区駒越西2丁目12-10（27年9月末まで※）
TEL: 054-334-4854 FAX: 054-334-0888
e-mail: haruki1_katayama@pref.shizuoka.lg.jp（片山晴喜）
※果樹研究センターは移転に伴い，10月以降，住所が変更されます（電話ならびにファックス番号，メールアドレスは変更されません）。
静岡県農林技術研究所 土井 誠
〒438-0803 静岡県磐田市富丘678-1
TEL: 0538-36-1556 FAX: 0538-37-8466
e-mail: makoto1_doi@pref.shizuoka.lg.jp（土井 誠）

Since 1985 ～昆虫学土曜セミナーは30周年を迎えました～

昆虫学土曜セミナーでは，昆虫学・生態学・進化学・生物学分野の第一線で活躍中の研究者をお招きして，3時間に渡ってディープに講演していただいております。1985年に始まり，おかげさまで回も320回を越え，多くの関係者が知る名物ゼミとなったと思い感謝しております。今年度は，1985年6月29日の中筋房夫氏の記念すべき第1回講演から数えて，30周年の節目にあたります。今後も，他に例を見ないユニークかつエキサイティングな情報交換の場として継続していきますので，ご興味のある方はどの回からでも，お気軽にご参加ください（参加申込みは原則不要です）。

1. 開催日：通常は毎月1回第四または第三土曜日（原則）
2. 場所：岡山大学農学部I号館1階 1番講義室（場所を変更することもあります）
*土曜日には農学部の建物入り口に鍵がかかっております。1時半から農学部の南中央入口（正面玄関に向かって左側壁の中央あたり）に係の者が立っておりますので，そこからお入り下さい。
3. 主催：岡山大学進化生態学研究室・昆虫生態学研究室（世話役：宮竹貴久）
4. その他：今後の講演予定等，詳細については下記ホームページにてご確認ください。

<http://www.agr.okayama-u.ac.jp/LAPE/dozemi.html>

第44回常任幹事会議事録 (概要)

日 時：平成26年12月19日 (14:00～15:00)

場 所：ホテルラングウッド (東京都荒川区東日暮里)

参加者：本多，柴尾，春山，岸本，田中，西松，後藤，豊嶋，中野 (昭) (兼徳島大会事務局)
林，丸山，宮井，山本，和田

欠席者：諫山，大井田，岡崎，加進，上遠野，木下，國友，西東，西森，根本，望月，八瀬，
矢野 (敬称略 順不同)

1. 開会挨拶 (挨拶) 本多会長 (会議進行) 柴尾副会長 (議事録) 春山副会長

2. 報告

(1) 前回第43回常任幹事会の議事録の承認

(2) 事務報告

①会員動向・役員・都道府県幹事

平成26年3月31日現在：408名

平成26年度 新規入会39名，退会3名

平成26年11月30日現在：444名

名誉会員 (6名)：正野俊夫氏，廿日出正美氏，池田二三高氏，古橋嘉一氏
宮田 正氏，本山直樹氏

研究会役員 (2014.1.1～2016.3.31) (省略)

県幹事が1名交代 (26年7月以降) 大分県：小野氏 → 岡崎氏

②平成26年度事業報告，予算執行状況および会計監査 (概要)

・事業報告

常任幹事会 (第43，44回)，第19回徳島大会，総会，
ニューズレター (No.33発行，No.34予定)

・予算執行状況 (平成26年11月30日現在)

収入1,466,009円 支出416,089円 残高1,049,920円

次年度繰越金 1,049,920円 (前年度繰越金 1,215,973円)

以上，異議なしで承認。

(3) 役員会報告

(4) ニュースレターおよびホームページ関連

1) ニュースレター関連

・No.33発行報告

7月15日発行済，475部，32ページ，発刊経費：237,946円

・No.34編集報告

原稿依頼，県幹事Bグループ 執筆予定10名，うち6件受領

1月中旬印刷予定，1月下旬発行予定

2) ホームページ関連

・更新状況 (平成26年7月～)

7月22日 会員数，名誉会員，常任幹事の更新

・研究会ウェブサイトの移転について

レンタルサーバ候補 さくらインターネット スタンダードプラン容量100GB

費用 初年度8,000円 2年目以降7,000円 事務費で計上

ウェブサイトドメイン agroipmを残す方向で進める

移行スケジュール 平成27年4月より早い段階で移行の予定

(5) 第19回農林害虫防除研究会徳島大会（平成26年）開催報告

中野大会事務局から報告

○開催報告

参加者合計172名で、シンポジウムの他、23題の一般講演があった。しかし、林業関係がなく今後は働きかけが必要と思われた。企業展示は3社、大会運営はOATアグリオ社の協力を頂いた。また、徳島県のPRですだちくんの参加、阿波踊りの披露、地元特産物、料理お酒など徳島を十分味わっていただいたと思う。昼食時には、びわでピロキジラミの初発確認で現地検討会を急遽開催することもできた。

一方、参加締切り直前のエントリーが100名あり、当日参加の10名が事前連絡なしで手土産が不足した。情報交換会の当日参加も多く、料理が足りるかどうかの不安があった。参加申込の締切以降は参加費の値上げや、当日参加の事務局負担の増加を事前に理解してもらおうアピールが必要と感じた。

また、領収書の宛名に団体名の要求が多く、受付事務の混乱となったため、エントリーシートに領収書の宛名の記載も必要である。当日入会は研究会会計への払い戻しが煩雑なため、大会会計とは別に研究会で徴収されることを提案する。さらに、開催地での非会員の参加者を増やすために参加費の免除があれば本会の活動を広くPRできると思うので提案したい。

反省点として、会場がフラットであったため、画面が見難いという声があった。他に階段会場もあったが、机がなかったため当会場とした。今後再考されればと思う。

会場の画面については、画面を上げればよろしいとの意見があった。

○大会会計決算

- ・参加172名（名誉会員2名、会員106名、非会員57名、スタッフ等7名、シンポジウム講演発表者は会費免除）
- ・収入の部
研究会助成金、日植防助成金の他コンベンション助成金の合計が150,000円の見込に対し300,000円となった。
参加費会員103名、非会員56名の合計215,000円、情報交換会123名で861,000円、広告掲載12社で270,000円、企業展示3社の30,000円他
以上で合計2,093,867円
- ・支出の部
会場123,990円、情報交換会および名誉会員宿泊費929,010円
講演要旨印刷代63,612円（190部印刷、うち20部研究会事務局へ）
飲料および情報交換会飲料62,009円、阿波踊り出演料240,000円
その他170,711円

研究会への返納 504,535円

以上で合計2,093,867円

○アンケート結果

大会開催時期 回答119

いつでも：65, 6月：15, 7月：18, 8月：8, 9月：7, 10月：4

シンポジウムのテーマ 回答52

現地で問題となっている害虫とその防除対策など：15

薬剤抵抗性問題：15

侵入害虫, 近年問題となっている害虫の生態, 防除対策など：11

以下, 少数のため省略。

以上に対し, 大会残金の有効利用, 地元参加者の費用について, 県独自で別途出し開催県の裁量で方法を考えるなどの意見が出た。

3. 議題

(1) 平成27年度事業および予算案

①平成27年度事業計画

平成27年7月 第45回常任幹事会, 第20回大会, 総会 (大分県大分市) 開催

7月 ニュースレターNo.35発行

12月 第46回常任幹事会 (東京都) 開催

平成28年1月 ニュースレターNo.36発行

②平成27年予算案 (平成26年12月1日現在)

収入合計 1,489,920円

(会費438,000円, 雑収入2,000円, 繰越金1,409,920円)

支出合計 1,489,920円

(ニュースレター関係350,000円, 大会関係200,000円, 会議費150,000円, 事務費30,000円 (内ウェブサイト関係10,000円プラス), 予備費759,920円)

以上, 異議なしで承認。

(2) 第20回農林害虫防除研究会大分大会 (平成27年) 開催準備状況

- ・大会事務局欠席により柴尾副会長から説明

平成27年7月21日～22日

シンポジウムテーマ「新たな薬剤抵抗性害虫への対応を考える」

基調講演, 特別講演はほぼ決定。

20回大会特別講演

神山氏了承, メーカー代表として講演。本会創立時メンバーとして講演のお願い。

タイトルは, 「メーカーにおける農薬開発と抵抗性対策 (案)」

岡崎事務局へは後日, 西松氏が連絡。

(3) 第21回農林害虫防除研究会 (平成28年) 開催候補地

大会事務局欠席により, 柴尾副会長から説明

- ・大会事務局

山梨県果樹試験場, 村上氏, 内田氏が主体となる。

・開催時期

9月開催を提案したい。理由としては、6～7月は試験研究で多忙な時期で、若干忙しさがまぎれる時期が9月のため。

会則第13条に「大会は毎年6～7月に行う」とあり、9月開催についての意見を伺うとともに、開催時期として問題なければ会則の変更が可能かどうか検討願いたい。

・時間

初日 13:00～2日目 12:00、課題の申込数によっては要検討

以上の説明に対し、ダニ学会、国際昆虫学会が9月、日植防シンポジウムが8～9月に開催される予定とのコメントがあり、後日情報を整理して日程を決定することとした。

については、常任幹事への調査依頼を柴尾副会長からメール案内することとした。

(4) その他

- ・第45回常任幹事会（予定）：大分大会初日の平成27年7月21日午前中に開催予定。

農林害虫防除研究会会則

(名称)

第1条 本会は、農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳を Agricultural Insect Pest Management Society of Japan（略称 AIPM Society of Japan）とする。

(目的及び事業)

第2条 本会は、農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い、会員相互の知識の高揚と親睦を通じて、農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、目的達成のため次の事業を行う。

- (ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換 (オ) その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

(会員)

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員、名誉会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。名誉会員は本邦農林害虫防除の発展に多大な功績があり、常任幹事会によって推挙された個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

(役員等)

第8条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 常任幹事 25名前後
4. 事務長 1名
5. 都道府県幹事 47名
6. 会計監査 2名
7. ニュースレター編集担当 2名
8. 情報担当 1名

第9条 役員の任期は2年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員の選出方法は以下の通りとする。

(ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考・承認し、総会で報告する。

(イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。

(ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。

(エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第12条 本会が必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年1回、通常、大会期間中に開催する。大会は原則として毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費、寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 1. この会則は平成8年6月22日から施行し、一部改正を平成13年6月28日に行った。

2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。

3. この会則の一部改正に伴い、会計年度を以下の通りとする。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日、平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。

4. この会則の一部改正は平成20年6月26日から実施する。

5. この会則の一部改正は平成25年7月11日から実施する。

6. この会則の一部改正は平成26年7月7日から実施する。

7. この会則の一部改正は平成27年7月21日から実施する。

農林害虫防除研究会名誉会員名簿

正野俊夫、廿日出正美、池田二三高、古橋嘉一、宮田 正、本山直樹

農林害虫防除研究会役員名簿 (2014. 4. 1 - 2016. 3. 31)

会 長：本多健一郎

副 会 長：柴尾 学，春山裕史

常任幹事：諫山真二，大井田 寛，岡崎真一郎，加進丈二，上遠野富士夫，國友義博，後藤哲雄，
西東 力，**執行拓宇**，豊嶋悟郎，中野昭雄，西森俊英，根本 久，林 直人，**藤岡伸祐**，
宮井俊一，村井 保，望月 淳，八瀬順也，矢野祐幸，山本敦司，和田哲夫

事 務 長：岸本英成

会計監査：西東 力，木下正次

ニュースレター編集担当：田中雅也，**藤岡伸祐**

情報担当：岸本英成

太字ゴシック体は，2015年4月以降に交代した常任幹事

農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿

都道府県	氏名	都道府県	氏名	都道府県	氏名
北海道	岩崎暁生	新潟	中野 潔	岡山	佐野敏広
青森	木村勇司	富山	大窪延幸	広島	栗久宏昭
岩手	大友令史	石川	八尾充睦	山口	本田善之
宮城	増田俊雄	福井	高岡誠一	徳島	中野昭雄
秋田	菊池英樹	岐阜	市橋秀幸	香川	三浦 靖
山形	永峯淳一	静岡	松野和夫	愛媛	窪田聖一
福島	荒川昭弘	愛知	三宅律幸	高知	広瀬拓也
茨城	横須賀知之	三重	西野 実	福岡	嶽本弘之
栃木	小山田浩一	滋賀	山本雅則	佐賀	衛藤友紀
群馬	藍沢 亨	京都	徳丸 晋	長崎	寺本 健
埼玉	植竹恒夫	大阪	田中 寛	熊本	古家 忠
千葉	河名利幸	兵庫	山下賢一	大分	岡崎真一郎
東京	加藤綾奈	奈良	井村岳男	宮崎	黒木修一
神奈川	大矢武志	和歌山	貴志 学	鹿児島	井上栄明
山梨	村上芳照	鳥取	大澤貴紀	沖縄	金城邦夫
長野	栗原 潤	島根	奈良井祐隆		

太字ゴシック体は，2015年4月以降に交代した県幹事

研究会への入会方法

入会希望者は下記事務局までご連絡ください。入会年度のNews Letterと振替用紙（郵便振替：

農林害虫防除研究会 00810-0-82999) をお送りします。年会費は1,000円です。入会フォームが農林害虫防除研究会HP (<http://www.agroipm.org>) からダウンロードできます。

事務局：岸本 英成

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

果樹研究所リンゴ研究拠点 虫害ユニット

〒020-0123 岩手県盛岡市下厨川字鍋屋敷 92-24

TEL 019-645-6157 FAX 019-641-3819 E-mail : kisimoto@affrc.go.jp

会費納入のお願い

2015年度会費の納入をお願いします。振り込み用紙を同封しておりますのでご活用下さい。会費は複数年分を同時に納入することが可能です。

2016年度までの会費納入状況については、西暦の下2桁と納入の有無を（ ）内に示してあります。（ ）内の○は納入済年度を、×は未納年度を、－は未加入年度を表しています。年会費は1,000円です。会費納入について不明な点があれば、上記事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

ニュースレターNo.36の原稿募集

ニュースレターは皆様の投稿で成り立っています。昆虫や防除に関連する文章の投稿をお待ちしています。文字数は400～1,600字程度で書式の規定はありません。カラーの写真や図表も掲載できます。投稿方法は、(1)電子メール、(2)フロッピーディスク郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。

使用するワープロソフトは、Windows版の一太郎、Word、Ms-Dosテキストを歓迎します。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：田中 雅也

兵庫県立農林水産技術総合センター 病害虫部

〒679-0198 兵庫県加西市別府町南ノ岡甲1533

TEL 0790-47-1222 FAX 0790-47-0549

E-mail : masaya_tanaka@pref.hyogo.lg.jp

編集後記

皆様方のご協力で今号も無事発刊できました。忙しい時期にも関わらずご執筆いただいた皆様、本当にありがとうございます。引き続きご支援よろしくお願いたします。(編集担当 田中雅也)

***** ニュースレターNo. 35 (2015年7月発行) 目次 *****

<巻頭言>			
「あれから20余年」	西東 力	・・・	1
<ニュース>			
資料の紙媒体は必要か?	後藤哲雄	・・・	2
“落とし文”考	林 秀樹	・・・	4
「日頃の観察は何よりの対策」	植竹恒夫	・・・	6
ダイズサヤタマバエはなぜ秋田県のエダマメで多発生するようになったのか?	菊池英樹	・・・	7
虫屋の妻の叫び	清水 健	・・・	8
大学校での病害虫の講義	栗久宏昭	・・・	10
はじめてのヤゴ調査	栗原 潤	・・・	11
ミナミアオカメムシの魅力?	大仲桂太	・・・	13
人生初のキンカメムシとの出会い	近森ちさこ	・・・	14
<お知らせ> ・・・ 15			
<第44回常任幹事会議事録(概要)> ・・・ 17			
<農林害虫防除研究会会則> ・・・ 20			
<農林害虫防除研究会名誉会員名簿> ・・・ 21			
<農林害虫防除研究会役員名簿> ・・・ 22			
<農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿> ・・・ 22			
<研究会への入会方法> ・・・ 22			
<会費納入のお願い> ・・・ 23			
<ニュースレターNo.36の原稿募集> ・・・ 23			
<編集後記> ・・・ 23			
<目次> ・・・ 24			

<著作権>このニュースレターに掲載された記事の著作権は当研究会に帰属します